



瑞芳



SNET台湾 みんなの台湾修学旅行ナビ
https://taiwan-shugakuryoko.jp/spot_north/451/



エリア

新北市

テーマ

歴史

自然

産業

瑞芳の鉱業遺跡群

清朝末期からの鉱山地帯 —近年は産業遺産を中心とした 観光地として注目

宜蘭線の瑞芳駅周辺、別項で紹介する九份、金瓜石は、現在はいずれも新北市瑞芳区の一部となっています。かつてこのあたりには金、銅、石炭などの鉱山が多くあり、清朝末期から採掘がおこなわれていました。日本統治期を経て第二次世界大戦後も採掘は続けられましたが、資源の枯渇、事故の頻発、産業構造の転換などにより、瑞芳では1990年までにすべての鉱山が閉鎖されました。最盛期には鉱山労働者や家族、かれらを相手とする商業の発達でおおいにぎわったこの地域も衰退を余儀なくされましたが、今日では観光地として、また産業遺跡が数多く残る地域として、あらためて脚光を浴びています。

学びのポイント

1.

鉱山を開発したのはだれ？

清朝末期から採炭や砂金の採取がおこなわれていましたが、日本統治期に多数の金鉱や炭鉱の経営を握ったのが顔家という家族です。地名を頭につけて基隆顔家と呼ばれます。事業拡大の立役者となった顔雲年は歌手の一青窈の曾祖父にあたります。顔雲年の死後も、顔家は運輸業、林業、水産業、造船業、金融業などさまざまな分野に進出し、一大企業グループを築きあげました。日本統治期には、北部の板橋林家、中部の霧峰林家、鹿港辜家、南部の高雄陳家とともに台湾五大家族に数えられています。

2.

炭鉱町はどんな様子だった？

瑞芳駅から宜蘭方面へ一駅、猴硐駅周辺の猴硐煤鉱博物館区に行ってみるといいでしょう。かつてここに、台湾で最大量の石炭を産出した瑞三炭鉱がありました。もともとは日本統治期に、顔雲年と鳥取出身の鉱山実業家、木村久太郎が共同で開発した炭鉱です。1990年に閉山しましたが、建物や関連施設が保存、再利用されています。出坑してきた鉱員の浴場を改装した鉱工記念館や、元鉱員が協力して瑞三本鉱口そばで運営している煤郷鉱工文史館では、過酷な労働環境や鉱員たちの日常を知ることができます。園区内には他にも、選炭場跡、鉱員宿舍跡、日本統治期の猴硐神社の鳥居などが点在しています。

3.

「天空の城」とは？

瑞芳市街地から山道を走り、九份、金瓜石をこえて海辺の方向に降りて行ったところに水湳洞十三層遺址があります。金瓜石で採掘された銅の選鉱場跡で1933年に建てられ、1987年まで操業していました。下から上まで13層(18層とも)になっていると言われる廃墟で、「天空の城」と称される幻想的な姿をながめることができますが、敷地内には入れません。鉱物と化学反応をおこした地下水が流れる黄金瀑布や、それが海に流れ込んで海水が変色している陰陽海も近くです。